

2023 AC

The 2nd Celebrate Hanukkah

原語で味わう創世記第2章

12/24~31

No.2 25日(朝)

1. 2章6節(テキスト)

【新改訳2017】

ただ、豊かな水が地から湧き上がり、大地の全面を潤していた。

【聖書協会共同訳】

しかし、水が地下から湧き上がり、土の面をすべて潤した。

●神はまだ天からの雨を地に降らせていませんでしたが、地から湧き上がる水が大地(土)の全面を潤していたことが6節に記されています。この時点でも地と天はまだつながっていません。

●舞台は「地」(אֶרֶץ)から「大地」(הָאֲרָצָה)へと移り、やがては「エデン」(עֵדֶן)から「園」(גֶּן)へと移っていきます。

2. 地から湧き上がる「エード」(אֵד)

ハーアダーマー ペネー コル エット ヴェヒシュカー ハーアーレツ ミン ヤアレ ヴェエード

אֵד יַעֲלֶה מִן־הָאָרֶץ וְהִשְׁקָה אֶת־כָּל־פְּנֵי־הָאָדָמָה׃

大地の表面のすべてを そして潤していた その地 から 上がっていた 水が

● 「エード」(אֵד)という語は、この箇所とヨブ記36章27節の2回しか使われていません。ヨブ記では「エード」と「マータール」(=雨)の間には密接なつながりがあるように記されています。それは「地」と「天」を代表しています。

● 「エード」(אֵד)を口語訳と七十人訳が「泉」、新改訳第3版、新共同訳、聖書協会共同訳、フランシスコ会訳が「水」、岩波訳が「地下水」、新改訳2017では「豊かな水」と訳しています。他にも「水蒸気」とか「霧」といった意味があります。それらは霊的な水(=神のことば)を意味します。地から湧き上がる(הִלָּף)水が、大地の全面を潤していました。

3. 大地の全面を潤している ①

●6節では「大地の全面を潤していた」とありますが、いまだ天にある雨は降らず、地と天は一つに結ばれていません。つまり7節で、人が形造られ、いのちの息が吹き込まれない限り、地と天は結び合わないのです。5～6節は、1章2節に「地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた」とあるように、地において神がなされることを待ち構えているという状態のイメージです。

●7節で神の「いのちの息」が人に吹き込まれるとき、地(人)と天(神)はつながります。「その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます(צֹרֵךְ)」(ヨハ4:14)。また、「人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出る(נָחַל)ようになる」(同7:38)のです。つまりイエシュアが与える水は人の霊の中で「水源」となって湧き出し、永遠のいのちへと至らせるのです。そのことが成就されるのは復活の日の夕べです。そのようにして地と天が、神の霊の流れによって一つになる(回復する)ことを啓示しています。創世記2章6節は、それ以前の状態を示していると考えられます。

3. 大地の全面を潤している ②

●さらに6節の重要な語彙の一つに、「湧き上がる」(使役態)と訳された「アーラー」(אָרָר)があります。この語彙はとても重要です。丁寧に調べていく必要があります(旧約892回)が、その使役態は「復活・昇天」を意味します(Iサム2:6、創37:28、50:24, 25、出3:8、33:15、エゼキエル37:12, 13、ヨナ2:6)。

●動詞「アーラー」の基本形は「上る、登る、行く、帰る」という意味ですが、使役態では「上げる、携え上る、導き出す、呼び出す、献げる、灯す」という意味で、神(天)への方向性を指し示すことばです。ここから、ノアの祭壇の「全焼のいけにえ」(「オーラー」אָרָר)、いちじくの「葉」(創3:7)やオリーブの「若葉」(同8:11の「アーレ」אָרָר)が派生しています。そのことを考えるなら、**神のご計画において、新たなことが始まることを予感させる語彙とも言えます。**

4. 2章7節(テキスト) ①

【新改訳2017】

神である主は、その大地のちりで人を形造り、
その鼻にいのちの息を吹き込まれた。
それで人は生きるものとなった。

ハーアダーマー ミン アーファール ハーアーダーム エット エローヒーム アドナイ ヴァイーツェル

וַיִּצַר יְהוָה אֱלֹהִים אֶת־הָאָדָם עֹפָר מִן־הָאָדָמָה
大地 から ちりで その人 を 神である主は 形造った

ハッヤー レネフェシュ ハーアーダーム ヴァイエヒー ハツイーム ニシュマツト ベアッパーヴ ヴァイツパハ

וַיִּפַּח בְּאַפָּיו נְשֵׁמַת חַיִּים וַיְהִי הָאָדָם לְנֶפֶשׁ חַיָּה׃
生きるものと その人は なった いのちの 息を その鼻に 吹き込まれた

4. 2章7節(テキスト) ②

●7節には、以下の六つの語彙が登場します。(5)を除くと、すべてが初出箇所(最初の言及)となります。

(1) 「ちり」(「アーファール」 אֶפֶר)

(2) 「いのちの息」(「ニシュマツト・ハツイーム」 נְשֻׁמַת חַיִּים)

(3) 「形造る」(「ヤーツアル」 יָצַר)

(4) 「吹き込む」(「ナーファハ」 נָפַח)

(5) 「生きるもの」(「ネフェシュ・ハツヤー」 נֶפֶשׁ חַיָּה)

(6) 「その鼻に」(「ベアツパーヴ」 בְּאַפָּיו)

5. 「ちり」(「アーファール」 אֶפֶר) ①

●大地の「ちり」(111回)とは、それだけでは空しい、無価値な、卑しいものの比喩として用いられます(創3:14,19,19、詩103:14、ヨブ22:24)。陶器師である神である主が、「ちり」を「粘土」にして形造るなら、最高のものとなります。人は「ちり」から形造られるのですが、野の獣や空の鳥は「土」(「ハーアダマー」 הָאָדָמָה)から形造られます(2:19)。この違いが意味していることは何でしょうか。

①【新改訳2017】ヨブ記 10章9節

思い出してください。あなたは私を粘土(「ホームル」 הָמָל)のようにして造られました(הָאֶפֶר)。私を土のちり(「アーファール」 אֶפֶר)に戻そうとなさる(בֹּשֶׁ)のですか。

②【新改訳2017】イザヤ書64章8節

・主よ、あなたは私たちの父です。私たちは粘土(「ホームル」 הָמָל)で、あなたは私たちの陶器師です。私たちはみな、あなたの御手のわざです。

5. 「ちり」(「アーファール」 עֶפֶר) ②

●陶器師が選び出した粘土を何度も揉んで形にしたあと、それを火で焼くことで陶器となります。これはとても大切なプロセスです。火で焼くとは「試練」を意味します。「ちり」を特別に選ばれた粘土として目に見える形にした後に、火という試練(苦しみ)を通して神の作品とするのです。そのことは神の民イスラエルに対してのみなされます。イスラエルを形造った(ヤーツアルした)方が、「わたしの目には、あなたは高価で尊い」と言っておられます(イザヤ43:4)。

●このように、「ちり」は「イスラエルの民」のたとえと言えます。というのも、エジプトの大地からイスラエルの民を連れ出し、神ご自身の手でそれを「形造り」、「いのちの息」を吹き込んで生きるものとするという神の偉大なストーリーが隠されているからです。「神である主」という名に「贖い」の概念が含まれていることが、ちりから粘土にして作品を形造る陶器師に啓示されているのです。⇒申命記7章8～9節を参照。

6. 「形造った」(「ヤーツアル」 יָצַר)

● 「ヤーツアル」という動詞は、陶器師が粘土を形造って作品とすることをイメージさせます。この動詞は63回使われています。この語彙は、陶器師なる神である主のイスラエルに対する扱いを知る上で、きわめて重要です(エレミヤ18:1~12, 19:1~2, 11~12参照)。

● キリスト者とは「宝を入れた**土の器**」であると、パウロは述べています(Ⅱコリ4:7)。ここでいう「宝」とは、贖われた私たちのうちに住んでおられる「イエシュアのいのち」、すなわち「復活されたキリストのいのち」です。その宝を入れる「**土の器**」の原型が、まさに創世記2章7節に登場する「その人」「**ハーアーダーム**」(רֹאשׁ אָדָם)なのです。単に、人類が造られたという話ではないのです。

7. 「吹き込む」(「ナーファハ」 נָפַח) ①

● 「息を吹き込まれた」の「吹き込む」と訳された「ナーファハ」(נָפַח)は、炭火を吹き起こして燃え立たせるという意味です。火は息(風)を吹きつけることで勢いよく燃えます。水の中に溺れて仮死状態になっている者に、息を吹き入れて生き返らせることがあります。同様に、「その人」は神の「いのちの息」が吹き込まれることで、他の被造物とは異なる「ネフェシュ・ハッヤー」となります。ですから、「死」とは神の「いのちの息」を喪失したか、あるいはそれが機能不全に陥ったことを意味します。もしこの神の「いのちの息」を喪失したならば、「人は栄華のうちにあっても、悟ることがなければ、滅び失せる(ほふられる)獣に等しい」(詩篇49:20)とあるように、人は他の生き物と何ら変わる事のない単なる「ネフェシュ・ハッヤー」となってしまふのです。

7. 「吹き込む」 (「ナーファハ」 נָפַח) ②

● 十字架で死なれたイエシュアは、復活された日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちのところへ現れました。そして、彼らに「息を吹きかけて」言われました。「聖霊を受けなさい」(ヨハ20:22)と。

● 「息を吹きかけて」がヘブル語の「ナーファハ」(נָפַח)です。ギリシア語では「エムフユサオー」(ἐμφυσάω)で、新約聖書ではここ一度限りです。このことは創世記2章7節で、神が人に「いのちの息を吹き込まれた」後に、人が天にある神の霊の流れのいのちにあずかることと似ています。これを与えて、神と人との本来の関係を回復するために、御子が人として来なければならなかったのです。

8. 「生きるもの」

(「ネフェシュ・ハツヤー」 נֶפֶשׁ חַיָּה)

「生きるもの」 = 「生きるいのちのあるもの」
= 「ネフェシュ・ハツヤー」

●この表現は「人」だけでなく、創世記1章30節にもあるように、「生きるいのちのあるもの」(獣、鳥、這うもの)すべてに対しても使われています。1章30節を、新改訳第2版では「いのちの息のあるもの」と訳していましたが、しかしこれでは、2章7節の「ニシュマツト・ハツイーム」(いのちの息)と変わらないため、【新改訳2017】では「生きるいのちのあるもの」と改訳されました。「生きるいのちのあるもの」と「生きるもの」とは、同じく「ネフェシュ・ハツヤー」ですが、「人」には特別な「霊」(息)が与えられているのです。

9. 「その鼻に」 (「ベアツパーヴ」 בְּאֶפְרַיִם)

●最後に取り上げるのは、神が人の鼻に(直訳は「彼の鼻孔に」=「ベアツパーヴ」 בְּאֶפְרַיִם)いのちの息を吹き込まれたとき、神と人の顔が向き合った形であったということです。これは2章後半で、人と、それに「向かい合う者としての助け手」(「エーゼル・ケネグドー」 אֵזֶל כְּנַגְדּוֹ)とのかかわりの型となっています。

●ヘブル語には「顔」を意味する語彙として、「アツパーム」(אֶפְרַיִם)と「パーニーム」(פָּנִים)があります。いずれも双数名詞で、前者の「アツパーム」は「アフ」(אֶפֶס)から由来し、鼻孔を意味します。それは顔の際立った部分であり、顔全体を指す名称としても使われるようになります。創世記19:1、42:6を参照。

●私たちが「新しいエルサレム」において神に仕えるとき、私たちは「御顔を仰ぎ見る」とあります(黙示22:4)。私たちにいのちの息を吹き込んでくださった神の御顔を見ることができるのは、神と人とが共に住む家における究極的な祝福であり、喜びなのです。「御顔を仰ぎ見る」という表現は、聖書で3回(詩篇11:7, 17:15、黙示22:4)です。

10. 「容器としての人」 ①

【新改訳2017】ローマ人への手紙9章21、23節

21 陶器師は同じ土のかたまりから、あるものは尊いことに用いる器に、別のものは普通の器に作る権利を持っていないのでしょうか。

23 しかもそれが、栄光のためにあらかじめ備えられたあわれみの器に対して、ご自分の豊かな栄光を知らせるためであったとすれば、どうですか。

● 聖書は私たちが**神の器**であると述べています。器とは容器であり、道具や器具とは異なります。器は何かするために使われるのではなく、何かを入れるために用いられるものです。私たちは神を入れるように運命づけられているのです。私たちは、神の容器となり神を表現するように造られたのです。神は私たちが「**神の栄光のためのあわれみの器**」になることを願っておられます。

「あわれみの器」 = 「ケレー・ハハニーナー」 (כְּלֵי־חַנִּינָה)

11. 「容器としての人」②

- 神の意図は、私たちが神ご自身で満たすことです。

【新改訳2017】箴言20章27節

人間の息は主のともしび。腹の底まで探り出す。

- 人間の息とは「ニシュマツト・アーダーム」(נִשְׁמַטוֹת אָדָם)で「人の霊」を意味しています。しかもそれは「主のともしび」(「ネール・アドナイ」נֵר אֲדֹנָי)です。「ともしび」は容器です。それには明かりを灯す油が入っています。それは光を放つための油を入れる容器なのです。同様に、私たちは内側に、「人の霊」という容器を持っているのです。復活されたイエシュアは「いのちを与える霊」となって、私たちの霊の中に内住しておられます。「私たちは、この宝を土の器の中に入れていますが」も同様の意味です。それゆえ、私たちは霊を働かせる必要があるのです。最初のアダムの悲劇は、サタンの巧妙なうそによって、この人の霊が機能不全にさせられてしまったことです。その回復のためにイエシュアが来られたのです。

今回のまとめ

●神である主が人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれたことによって、地と天がつながったことを学びました。

地と天をつなぐ役目をするのは「人の霊」と、その中に住む「聖霊」です。その予表を示す語彙が、6節の「湧き上がる」を意味する「アーラー」(אָרָר)と言えます。

●人が神の容器(器)であるということが、「形造る」という「ヤーツアル」(אָצַר)に込められています。そしてそれは、「神の栄光のためのあわれみの器」(ローマ9:23、24)となることなのです。